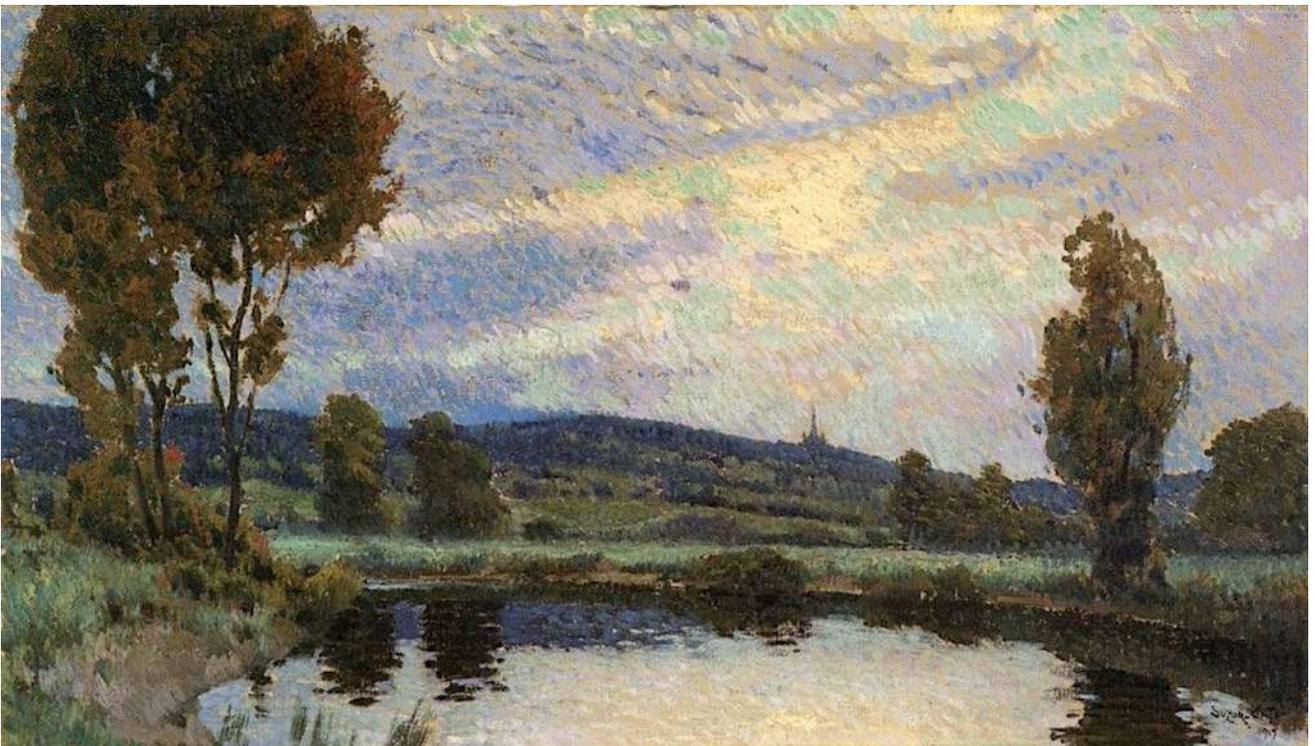

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 266

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5301. 夢を見るAI・トラウマを体験するAI
- 5302. 日々新たな自己と世界:今朝方の夢
- 5303. 一年半前のあの日の出来事:アムステルダムで行われたジャン・ピアジェ国際学会に参加した時の思い出
- 5304. アロマの儂さに魅せられて
- 5305. 自己の音響体:愛の放射に向かって
- 5306. シュタイナーの政治経済思想の探究に向けて
- 5307. 世界を「聴く」耳の開発に向けて
- 5308. 早朝の仮眠中のビジョン
- 5309. 祈りと感謝の念が持つ力
- 5310. 「聴くこと」と「在ること」
- 5311. 土作りと調和～地中の中で日々を生きて
- 5312. 漆黒の闇に抱かれて:緩やかな揮発過程の終わりに
- 5313. 今朝方の夢と願い
- 5314. 内なる芸術家の緩やかな目覚め:芭蕉に関する旅
- 5315. 「エポックノート」としての日記と作曲～自分なりの教科書を作成すること
- 5316. 今朝方の夢
- 5317. 芭蕉の感性:日々の小さな積み重ね
- 5318. オランダの健康保険に加入して～社会貢献としての保険料の支払い
- 5319. 檻に閉じ込められた鳥たち
- 5320. 天体と自己との調和が奏でる歌の創造に向けて

5301. 夢を見るAI・トラウマを体験するAI

時刻は午前3時を迎えたが、相変わらず外の風は強い。風が音が吹き荒れる中で、グスタフ・レオンハルトの演奏を聴いていた。そこでふと、人間が演奏することとAIが演奏することの違いについて考えていた。演奏にせよ、作曲にせよ、AIが今後より発達していけば、多くの演奏や作曲は本当にAIに置き換わってしまうのではないかという思いがある。作曲に関して言えば、もう小説を書けてしまうようなAIがいるぐらいなのだから、より数学的な法則性に忠実な作曲は、AIからしてみると、もしかしたら小説よりも難しくない領域なのかもしれない。

生身の人間にしか表現できないことを求めて、演奏家や作曲家が奮起し、創造性を十分に発揮するような刺激となる形でAIが活用され始めるのであれば、それは良いことなのかもしれないが、人間が行う演奏や作曲が完全にAIに置き換わってしまったらとても寂しい限りである。そうした事態を危惧する自分が存在しており、そうした事態が起こってしまう可能性としては、AIが完全に人間の生命現象を再現し、とりわけ意識というものを完全に再現できた場合なのだと思う。

レオンハルトの演奏を聴いていると、例えば音そのものであれば、もうAIでもそれを表現できてしまうかもしれない。端的には、音響学で扱うような物質的な次元の音であれば、もうAIは演奏者と同じ音を再現できてしまうだろう。逆に言えば、物質的な次元の音しか演奏できないような演奏者は、ほぼ間違いなくAIによって淘汰されるように思う。

生身の演奏者とAIが共存していく道があるとするならば、それは物質的な次元ではい、より精神的な次元の音を演奏者がどれだけ創造できるかにかかっているように思う。インテグラル理論の観点で言えば、グロスレベルの音しか出せないような演奏者はAIによってほぼ間違いなく存在意義を奪われるが、サトルレベルやコーザルレベルの音まで生み出すことができる演奏者は今後も生き残ることができ、AIとの共存の道を歩める可能性がある。ただし、ここで前提となっているのは、AIがまだ人間が持っているのと全く同じ性質の意識を獲得していないという点、そしてそれが非常に難しいという点が挙げられる。おそらくコンピューターサイエンティストや認知科学者のような右側象限を主戦場とする人たちから見れば、人間が持つ意識をAIが獲得するのはもう間近だと言うかもしれないが、そのあたりはどうなのだろうか。

人間が持つ意識に「近い」形のをAIが獲得すると言うのであれば、それは実現性があり、実際にはもうその実現が迫っているように感じる。しかし私は、AIが完全に人間の意識と同じ性質を持つものを獲得することは起こり得ないのではないかと思う。このあたりのテーマは私の専門ではないが、人間の意識というのは本当に宇宙と同じぐらい謎に満ちており、そして奥深い。AIが人間の意識を完全に再現するというのは、AIが宇宙を完全に創造するというに等しいのではないかと思う。

レオンハルトの演奏を聴きながら、きっと彼の指には、その時彼がいた場所から喚起される特定の感情やその日の天候や体調などによって絶えず変化しているエネルギーが込められているように思えた。また、使っている楽器との相性により、音が変わることもあるだろう。そして、レオンハルトがその日の朝に見た夢や、過去のトラウマ等を含め、その瞬間の演奏には無意識が多かれ少なかれ影響を与えている。

そのようなことを考えていると、AIが作動していない時間において、AIがちゃんと夢を見て、夢を見ない深い眠りの世界に落ちることがないのであれば、それは人間の意識を忠実に再現したことにはならないだろう。また、AIが人間と同様にトラウマ体験をして、それを引き受け、乗り越えていくような格闘をしないのであれば、それは人間の意識を忠実に再現したことにはならないだろう。

夢を見るAI、そしてトラウマを体験するAI。そして、夢やトラウマから影響を受けながらも、夢から啓示を得たり、トラウマと向き合う過程の中で意識を成熟させていくAIは誕生するのだろうか。AIは自らの人生において葛藤や苦悩を覚え、それらと向き合い、それらを乗り越える形で自らを成熟させていくことができるのだろうか。それができないのであれば、AIが人間の行為を完全に代替することは不可能であろうし、葛藤や苦悩を抱えることは人間の特権なのかもしれない。そのようなことをぼんやりと考えていた。フローニンゲン:2019/12/6(金)03:33

5302. 日々新たな自己と世界:今朝方の夢

強い風と共に小雨が降り始めた。外の世界はまだ深い闇と静寂に包まれている。気がつけば、今週も早いもので金曜日を迎えた。明日からは週末となる。昨日と同じ自分がやって来ることはなく、昨日と同じ世界がやって来ることはないということ。そして、日常そのものが絶えず創造的であると

いうこと。そのことについて先ほど思いを巡らせていた。このように毎日日記を綴っていると、その行為自体は実に淡々としたものなのだが、こうして毎日日記を綴ることによって、絶えず自分が刷新されており、絶えず世界が刷新されていることに気づく。

自分も世界も、毎日新たなものとして誕生し、自分の存在も世界の存在も一回きりのものなのだということに気づかされる。そしてその事実は、静かに自分の心を打つ。闇と静寂さの中でこうして日記を綴っている自分は、もはや昨日の自分ではなく、明日になればもうそこにはいないのだということ。そうした一回きりの自己を日々生きているのだということのを忘れず、その自己の中に生起した諸々の事柄を言葉や音の形にしていこう。それを改めて思った次第である。

それでは、今朝方の夢について振り返り、その後に早朝の作曲実践を始めたい。夢の中で私は、日本だと思われる国のある街の小さな駅にいた。そこは都会ではなく、長閑な景色から察するに、田舎のように思われた。私は大学時代のゼミの友人たちと待ち合わせをするためにその駅にいた。夏の太陽のような日差しが照りつけていたが、それは嫌になるような暑さを持つものではなく、とても爽やかな日差しであった。そんな日差しを浴びながらしばらく駅で待っていると、数名の友人たちが改札口から顔を見せた。挨拶もそこそこに、私たちは駅から目的地に向かっていく道順を確認し始めた。

この駅には2つ出口があり、そのどちらを使うのかによって、道順が随分と違ってきってしまうようだった。幸いにも、友人の中にこの辺りの地理に精通している者がいたので、彼の助けを借りて私たちはそれほど苦勞せず目的地に到着した。そこは、街の公民館のような佇まいを持つ1階建ての小さな建物であった。私たちは靴を脱ぎ、早速建物の中に入った。するとそこには、体育館のような比較的広々としたスペースが広がっていた。机や椅子などは見当たらず、本当に体育館のような見目をしていて。

すると突然、ゾロゾロと多くの人たちがその場に集まり始めた。その中に、中学校時代のバスケ部の先輩(KT)がいることに気づき、先輩に声を掛けた。何やら、今から合唱の練習が始まるとのことであり、先輩は歌うための準備をし始めた。私はいまいち事情が掴めなかったが、どうやら自分もその場に合唱の練習をしに来たようだと思い、多くの人たちと一緒に練習することにした。広々とした空間の中で、自分の立ち位置は右側のスペースだと思ったため、私はそちらに向かって歩き始めた。

すると、集まってきた人の中にはちらほら外国人がいて、その中でも特に、東南アジア系の、幾分日焼けした顔をしている男性の姿が目にとまった。私が彼の目の前を通り過ぎようとする、彼は笑顔で私の方に近寄ってきて、握手を求めてきた。それは、これから始まる練習に全力を尽くし、思う存分楽しもうという意図が込められたものだった。私は彼と握手し、その意図を感じた時に笑顔になった。いざ歌が流れ始めると、リズムが取りにくい箇所が随所があり、英語の箇所もあったので、苦戦を強いられたが、それを含めて、歌うことの素晴らしさ、しかも多くの人と場を共有しながら歌うことの素晴らしさを全身を通じて感じていた。フローニンゲン:2019/12/6(金)04:10

5303. 一年半前のあの日の出来事:アムステルダムで行われたジャン・ピアジェ国際学会に参加した時の思い出

「なんて素晴らしい研究発表の数々なのだろうか。同時に、このように『ご説明』に熱を上げ、自己を深く省みない形で人生を生きてなるものか」

そのようなことを思ったのは今から一年半前に、アムステルダムで行われたジャン・ピアジェ国際学会に参加していた時のことだった。それは学会の最終日の前日だったように思う。私が科学者として最後の仕事をしたのはその学会だった。そこで自分の研究を発表する機会に恵まれ、意気揚々と学会に出かけて行ったことが懐かしい。

学会には第一線級の発達科学者が集い、彼らが長年に渡って行ってきた研究に比べると、私が発表した研究は雛鳥のようなものだった。しかし彼らの研究と比較するような意識さえ芽生えないほどに、科学者としての実績が異なっていたことはある意味幸いだったのかもしれない。なにせ、理科系の科学者に転じようと思ったときにはもう私は30歳を迎えていて、しかもその学会での発表は、科学者としての歩みを始めてから間もなかったのであるから、そうした比較の意識さえ芽生えなかったのは当然である。

学会が始まってから二日間ほど、数々の洞察に溢れる発表を聞いている最中、今後の研究の参考にしていこうという意思があった。しかし、三日目に「それ」は起きた。「科学者というこの人たちが行っているのは、単なる「ご説明」なのだ」そんな気づきが突如として芽生えたのである。発達を取り巻く内外の現象そのものやプロセスを説明すること——「解明」というより洗練された言葉が好まれて

用いられる傾向にあるかもしれない——、それは確かに意義や価値のあることなのだが、それだけに熱を上げ、発達という現象そのものを通じて自らの人生を生きている発達科学者がほとんどないことに愕然とした気持ちになった。そのような気持ちが芽生えた時、もうこんな場所にはいないと思った。

科学の世界の中に閉じこもり、説明に熱を上げるような生き方はできないと思った。もっと大切なことが自分の人生にはある。そう思ったのは学会の三日目の午後だった。もう一年半前のことだから記憶が曖昧だが、もしかしたらその日の夕方に自分の発表があったのかもしれない。そして、上記のような気づきが芽生えたのはさらに一日早く、学会の二日目だったかもしれない。

学会に参加するために宿泊したホテルから、アムステルダム・ゴッホ美術館までは歩いてすぐだった。私は、こんなご説明の発表会みたいな場所に長時間いることがあまりにも馬鹿げたことであるように思われた。それはもう自分の人生の浪費であり、自分の人生という貴重な時間を冒瀆しているようにさえ思えたのである。そんな思いが芽生えた時、もう私は学会会場にはいなかった。ゴッホ美術館に行き、ゴッホの絵の前に立ち、彼が魂を込めて描いた絵を無心で眺めていたのである。

ゴッホの絵は、何も「ご説明」しない。説明はしない代わりに、私の魂を驚掴みにし、魂に何かを注ぎ込んできた。それは説明を仕事にする科学者には到底真似のできないことのように思われた。

美術館で、私はゴッホの画集をいくつか求めた。その日の夕方や、明るく日の夕方に自分の発表があったため、再度学会会場に足を運んだが、もうそのときには誰の発表も聞かずに、ホテルのロビーでコーヒーを飲みながら画集を無心で眺めていた。説明のご遊戯にはもう関心がなく、ゴッホの絵だけに心が向かっている自分がいた。そんな出来事が一年半前にあったことをふと思い出した。まだ夜が明けぬ闇の世界の中で、なぜ自分がそのようなことを思い出したのか定かではない。

人生から問われ続けているこの感覚に気づく。何をするのか、何をしないのか。何を続けていくのか、何を続けていかないのか。どのように生きていくのか、どのように生きないのか。それらを日々問われている自分がここにいる。そうした人生からの問いと向き合おうと思わずとも向き合わざるを得ない自分がここにいる。こうしたことも、人間の宿命の一つだとみなせるのだろうか。

自分の内側の何かが崩れ去り、新たなものが誕生しつつあることに気づく。一年半前のあの出来事は、また一つ自分の中で何かが崩れ去ったことの現れであり、同時に新しい自己の誕生を意味していた。そして、今再び何かが自分の内側で崩れ去ろうとしていることに気づく。

昨日ふと、吟遊詩人としての自己、農業に取り組もうとする自己を見出した。旅人であり、詩人的作曲家であり、日記を執筆する人であり、農業を営む人としての自分。旅をすることが、作曲をすることが、日記を書くことが自分の「仕事(ライフワーク)」になるとは思ってもみなかった。そして、そこに「農業」が付け加わる可能性が見出されている。真の変容というものが、過去の自分からは全くもって想像もできない自分に変貌することであるのならば、今自分に起こっているのは真の変容なのかもしれない。

冬はまだやってきたばかりだ。これからますます冬は厳しくなる。今年の冬が厳しければ厳しいほどに、自分の内側の変容は進んでいこう。そして私はますます、今の自分とはかけ離れた自分ならぬ真の自分に近づいていくのだろう。フローニンゲン:2019/12/6(金)07:07

5304. アロマの儂さに魅せられて

コーヒー豆を自分の手で挽き、それにお湯を注ぎ、コーヒーの完成を待つ楽しみ。そのシンプルな行為に最上の至福さを覚える。これはインスタントでは決して味わうことのできない特権的な至福さである。挽き立てのコーヒーの味が格別なだけでなく、なんとも言えない至福さに包まれた時を味わう格別さも挽き立てコーヒーを飲む魅力である。そして、コーヒーが持つアロマには本当に癒される。

アロマについて少し調べていると、コーヒーのアロマは、まるで線香花火のような、あるいは桜の花びらが舞い散るかのごとく儂いものだと知った。アロマは実に短命であり、ドリップしてからわずか3分ほどでその命を全うするそうだ。ここにコーヒーが生き物だということを見て取る。コーヒーにも命があり、アロマはその燃焼の証だったのだ。そうした命の燃焼としてのアロマを今味わっている。アロマを「頂いている」という表現をした方がいいかもしれない。

アロマというのは実に不思議なものであり、焙煎し立てのコーヒーにしか含まれておらず、インスタントのものには含まれていないようだ。インスタントコーヒーにお湯を注いだ時、確かにコーヒーの香りはするのだが、それはもう死んだ香りであり、ある意味死臭なのだ。

この秋に実家に帰った時、両親と三人で久しぶりにコーヒーでも飲みたいね、という話をしていた。確かに実家にはインスタントコーヒーが備え置かれていたのだが、せっかくなので豆を自分たちで選んできて、豆を手で挽こうということになった。父がすぐさまコーヒーミルを購入し、父と私は一緒にコーヒー豆を選びに買い物に出掛けた。帰ってきてから、いつもであれば手を使うことに関しては父に任せがちな自分が豆を挽いてみることにした。それが自分の初めての豆挽き体験だったように思う。後日、父が母と私のためにコーヒー豆を挽いてくれているときに、良い香りが漂ってきたので、その香りに癒されるという旨のことを伝えたところ、「豆を挽いている自分が一番癒される」というようなことを父が述べていた。

先ほど調べていると、まさに父が述べていたように、コーヒーのアロマは豆を砕いているときに一番放出されるようなのだ。そして、挽き終えた豆をドリップしている時に二番目にアロマが放出されるらしい。コーヒーを挽いている人、コーヒーを淹れている人が実は一番癒されるように感じる、と父が述べていたのは科学的にも正しいようだ。

今、コーヒーのドリップを終え、挽き立てのコーヒーを一口飲んでみた。思わず、「美味しい」という感嘆の声が漏れた。コーヒーの命をいただきながら、正午まで再び自分の取り組みを続けていく。フーニンゲン:2019/12/6(金)09:49

5305. 自己の音響体:愛の放射に向かって

環境、環境、環境。この外部環境。それは内側の環境と密接不可分に結びついていて、内側の環境に大きな影響を与えている。今朝方にも書いたにもかかわらず、もう一度書いてしまいたくなるのは、厳しい冬は本当にまだ始まったばかりなのだ。何日も続く雨。太陽の見えない日々。

何かを吹き飛ばしてしまいそうな強い風が吹いている。風が吹き、雨が降り、太陽の見えない中であっても、高らかに鳴き声を上げている小鳥たち。彼らの歌声がもたらす励まし。

ようやく始まった冬は、来年の5月末まで続く。それは嘘ではなく、この地の冬は本当にそこまで長い。存在を圧縮させ、そして濃縮させるような実存的厳しさを持つ冬のピークはどこでやって来るのか。そのタイミングは年によって違ったのか、同じくらいだったのか、もう分からなくなってしまっている。

今年今年。今日は今日。明日は明日。明日の風は明日に吹くのだ。

短い春、短い夏、短い秋にかけて、自分の内側に広がっていた音響体のようなものに気づく。それは広がりを持つ和音の形を持っていた。だが、この長い冬においては、その音響体は極度に密度を縮こまされる。広がりのある音ではなく、重密度の音を存在から生み出すことにつながりうる条件がここにあるのだが、その条件が仮に和音という音響体そのものを圧殺してしまったら、自己はとなり、自己は何を思うだろうか。

既存の自己が新たな自己に開皮するためには、実はそれが必要なのだ。自分の内側の音響体としての和音の圧殺が必要なのである。自分の小さな自己は、それ自身をまだ守ろうとしているようなのだ。それが続く限り、新たな自己は生まれない。新たな和音構造を持つ音響体は誕生し得ないのだ。

昨日、上の階に住む友人のピアニストと久しぶりにカフェでゆっくり話した。そこでは多岐に渡るテーマが取り上げられたが、「愛」の必要不可欠性と偉大さについて言及があったのを覚えている。自分はどれだけ、いろんな人から、いろんな街から、いろんな出来事や現象から愛を与えてきてもらったのだろうか。もう自分の内側は愛で満たされているのだ。それでもまだ愛を享受しようというのか。もうそのような状況から脱却する時期に差し掛かっているのを最近本当に強く感じる。愛で満たされた自己から愛を放射する時期に差し掛かっているのだ。愛を降り注ぐ行為なしには、もはや進めないとこころに来ているのではないかと思う。

雨が地上に静かに降り注いでいる。時刻はまだ午後の4時半なのだが、もう辺りは随分と暗い。暗い世界の中で降り注ぎ続けている雨。世界が明るかろうが、暗かろうが関係なしに天から降り注がれる雨。天の小さな自己は完全に滅却されており、我執のない無私の雨が地上に降り注がれている。フローニンゲン:2019/12/6(金)16:29

「とてもよく寝た」と思って時計を確認したら、午後10時半であり、就寝してから30分しか経っていませんでした。確かによく寝たという感覚があり、心身が十分に回復していたように思えたのだが、さすがに30分の睡眠では短いかと思って再度眠りにつきました。今度もまた「随分と深く眠ったな」と思って時計を確認したところ、明け方の12時半だった。結局今日はその時間帯に起床することにした。昨夜ベッドに入ったのが午後10時前であったから、2時間半ほどの睡眠時間である。

時刻は午前1時を迎え、今この時間帯の心身の状態はすこぶるいい。いつもと何も変わらずに、オイルプリングをし、ヨガを行って、白湯を飲んだ。そこから今は、チアシード入りの小麦若葉のドリンクをゆっくりと飲んでいる。

今は夜中の1時であるから、書斎の窓から見える赤レンガの家々の電気は大抵消えている。電気は消えていながらも、テレビの光がチカチカしている家があり、その家の住人は私とは全く違う生活をしているのだと思って微笑ましく思った。私はこの時間帯に起き、その住人はこれから寝るのだと思うと、幾分笑みが溢れてきたのである。人の生き方というのは本当に人それぞれだ。毎日の時間の過ごし方も本当に人それぞれなのだと思えて思う。

昨日の夜に、イギリスの書店より2冊の書籍が届けられた。1冊は、“The World Is Sound: Nada Brahma: Music and the Landscape of Consciousness (1983)”という書籍だ。こちらの書籍はタイトルから推察できるように、音楽、とりわけ音と人間の意識の関係性をトランスパーソナル心理学の観点から考察している興味深い書籍である。こちらの書籍に関しては、昨夜ざっと全体を眺め、特に目次などを入念に確認していた。今日から早速本書を読み進めていこうと思う。もう1冊は、12音技法を開拓したアーノルド・ショーンバーグが執筆した“Style and Idea: Selected Writings of Arnold Schoenberg (2010)”である。こちらの書籍は分量が多く、600ページ弱ある。こちらの書籍に関しても内容をざっと確認してみたところ、自分の作曲実践に活かせることがたくさんあることにすぐに気づき、上記の書籍を読んでからすぐにこちらの書籍も読み始めたいと思う。ショーンバーグの思想に触れながら、彼が開拓した技術に関してゆっくりと学びを深め、それを自分の作曲実践の中で活用したいと思う。とにかく実用に足る形で学びを深めていこう。

上記の2冊の書籍に加え、もう2冊ほど音楽関係の書籍が届く予定になっており、詩と神秘主義に関する書籍も近々届くであろうから、5冊ほどを年末年始にかけてじっくり読み進めていこうと思う。音楽と詩に関する探究を進めていくことに並行して、年明けには、ルドルフ・シュタイナーが執筆したバイオダイナミック農法に関する3冊の書籍(“Agriculture Course: The Birth of the Biodynamic Method”、“Nutrition: Food, Health and Spiritual Development”、“What is Biodynamics?: A Way to Heal and Revitalize the Earth”)を購入しようと思う。また、シュタイナーの政治経済思想にも最近関心を寄せており—シュタイナーは教育のみならず、芸術、経済、農業、医療と実に幅広い探究を行っていたことに改めて感銘を受ける—、数冊ほどそのテーマの書籍を購入しようと考えている。具体的には、下記の4冊を購入する予定だ。

1. Rethinking Economics: Lectures and Seminars on World Economics (Collected Works of Rudolf Steiner)
2. Social Threefolding: Rebalancing Culture, Politics & Economics – An Introductory Reader
3. The Fundamental Social Law: Rudolf Steiner on the Work of the Individual and the Spirit of Community
4. The Social Question: A Series of Six Lectures by Rudolf Steiner given at Zurich, 3 February through 8 March 1919

元々私は大学時代に経済学・経営学を学んでおり、当時学んでいたテーマが幾分形を変えて再び自分の中で立ち現れ始めたのは興味深い。探究というのはどうやら円環構造をなしているのかもしれない。

シュタイナーの経済思想の中でも、とりわけソーシャルファイナンスに近い考え方を学んでいこうと思う。そこから、ブロックチェーン技術(暗号資産)がもたらす新たな経済活動とシュタイナーの経済思想との関係を模索したり、シュタイナーの経済思想がそうした新たな経済活動にどのような貢献を果たしうるのかを考えていく。上記の4冊を年明けに購入し、ミラノの旅から帰ってきたら、本格的にそのテーマの探究を始めていこう。また昨日は、久しぶりに意識の形而上学的な書籍でも読んでみようかと思い、シュタイナーの書籍を探しているときに偶然見つけた“Meditation as Contemplative Inquiry: When Knowing Becomes Love”の購入も検討している。フローニンゲン:2019/12/7(土)
01:37

5307. 世界を「聴く」耳の開発に向けて

時刻は午前1時半を過ぎ、もう間も無くすると、午前2時を迎える。今日は早めに起床したため、朝の創造的な時間を思う存分に活用することができるだろう。そのようなことを考えると、気分が自ずから高揚していく。

昨日は、水を欲する植物の根が、水を一気に吸収しようとするような姿勢で、ハーモニーや対位法に関する理論書を読んでいて、その読書体験から得られるものは多く、今日もまた理論書を読み進めていく。先ほどの日記で書き留めた、音と意識に関する書籍と合わせて、作曲実践を豊にしてくれる理論書を並行して読んでいこうと思う。

音の響きに関して、グロス次元の音をより詳細に聴き分けられるようになるだけではなく、サトルやコーザル次元の音を聴き取れるような耳を開発していこうという思いが昨日芽生えた。おそらく、今後自分が納得するような曲を生み出すためには、そうした耳が必要になってくる。

世界を認識する新たな眼を獲得して日々を十全に生きることに加え、世界を「見る」だけではなく、世界を「聴く」ための新たな耳の獲得が求められる。詩人のルルケはかつて、「見る」ことの次に待っているのは「感じる」ことだと述べていた。対象を凝視する術を得た後に獲得するべきものは、対象を真に深く感じる術なのだ。おそらくルルケは、この世界の真相を眼で深く捉えていただけではなく、世界を「聴く」ことを通じて、世界を深く感じていたのだと思う。

サトルやコーザル次元の音を聴き取るような耳を開発していく手段に関して、何か具体的なものがあるかと言われると答えに窮するが、実践の方向性は見えている。具体的な実践内容については、シュタイナーの種々の思想からヒントを得ることが可能だろう。そうしたことも踏まえて、シュタイナーの音と色彩に関する書籍を改めて読んでいこうかと思う。

今日は一昨日と比べて、比較的暖かい。最低気温が7度もあるので本当に助かる。ただし、ここ最近の天気は悪く、今朝方に天気予報を確認したら、今日から7日間は雨マークが付されている。一日中雨が降ることはないのだが、今日から7日間は太陽の姿を拝むことは難しそうだ。そうであれば、少なくとも、自分の内側の太陽をしっかりと拝もうと思う。

今日はこれから早朝の作曲実践をし、それに並行して読書を行っていく。午後には雨が降っていないタイミングを見計らって、街の中心部のオーガニックスーパーに気分転換がてら足を運び、椎茸とバイオダイナミック農法で作られた4種類の麦のフレーク、そして豆乳を2本ほど購入したい。近所のスーパーでもオーガニックの豆乳が売られており、以前までは砂糖が一切含まれていない豆乳があったのだが、ここ最近はそれが入荷されなくなっているため、街の中心部のオーガニックスーパーでこれからは入手することになるだろうか。いずれにせよ今日もまた、今日にしか吹かない風を感じながら一日を十全に過ごしていこうと思う。フローニンゲン:2019/12/7(土)02:04

5308. 早朝の仮眠中のビジョン

時刻は午前9時半を迎えた。今朝は深夜未明の12時半に起床したこともあり、さすがに先ほど30分ほど仮眠を取った。つい今し方仮眠から目覚めたばかりであり、不思議な意識状態にある。まだ夢と現実の境にいるかのような感覚だ。仮眠から目覚めてみると、辺りはすっかり明るくなっていた。明るくなっていたと言っても、今日は曇り空なのだが、ようやく一日が始まった感覚がある。

深夜未明の12時半から活動を開始したおかげか、仮眠を取る時点ですでに6曲ほど短い俳句的な曲を作り、さらには今朝から読み始めたばかりの“The World Is Sound: Nada Brahma: Music and the Landscape of Consciousness (1983)”を全て読み終えてしまった。本書から得たことは随分と多く、近々それほど時間をおかずに再読をしたいと思う。まさか本日中に、しかも朝の時間帯に読み終わるとは思っていなかった。そのおかげで、ここからは作曲理論に関する書籍を読むことに時間を充てることができる。

明日からは、アーノルド・ショーンバーグが執筆した“Style and Idea: Selected Writings of Arnold Schoenberg (2010)”を読み進めていこう。こちらは600ページほどの分量があるので、1日で読めるとは思えないが、初読にそれほど時間をかけるのではなく、何度も繰り返し読む中で理解を深めていきたいと思う。

仮眠から目覚めたとき、目覚めの一杯としてのコーヒーが心底欲しくなり、先ほど豆を挽いた。ちょうど今、ドリップ仕立てのコーヒーができたところである。早速一口飲んでみたところ、その美味さには自画自賛してしまう。いや、それはコーヒーの淹れ方よりも、豆の質がそもそもいいからだと思った方

がいいかもしれない。いずれにせよ、自分が心を込めて作ったことには間違いなく、それがこうした美味を生み出すことに一役買っていたのだろう。

先ほど仮眠を取っている最中に、二つほど興味深いビジョンを見ていた。一つには、中学校時代にお世話になっていた個人塾がビジョンとして現れていた。その塾は、小中高時代の友人の父が先生をしている塾であり、先生の指導は厳しいことで有名だったが、私は先生から学ぶことが好きだった。家の一室が塾のスペースになっていて、改築をしたためなのか、私が塾に通い出した頃からすでに、生徒は15人以上は部屋に入れた。私はその部屋にいて、他のみんなが来るのを待っていた。

左隣を見ると、先生の息子であり、なおかつ私の友人がいた。彼と少しばかり雑談をしていると、先生が私たち2人にプリントを渡してくれた。見るとそれは、音楽理論に関する問題のようだった。「待っている間にそれを解いておくといい」と言われ、友人と私は問題に取り掛かった。問題は予想外に難しく、そもそも学校で音楽理論など習ったことがないのであるから、それらの問題など解きようがないように思われた。問題を解くことに対して諦めの気持ちと、あまり楽しさも感じられなかったため、何か自分の好きな勉強をしようと思ったところで場面が変わった。

次のビジョンの中で私は、友人2人と一緒に、町の小学校の体育館に向かっていた。そこで大学のフットサルサークルの練習をすることになっており、友人2人は違う大学に通っていたが、今日の練習に2人を誘うことにした。

体育館に到着してみると、そこにはまだ誰もおらず、私たちは3人でウォーミングアップがてら軽くボールを蹴って遊んでいた。しばらくすると、同学年で後にサークルのキャプテンになった友人(SO)と、一学年上の文武両道の優秀な先輩(TK)がやってきた。2人は同じ授業を履修しているらしく、私たちがボールを蹴っている場所にやってくるまで経済学の話をしていた。2人がやって来たところで、早速練習を始めることになったが、先輩がカバンからパソコンを取り出し、サークル専用のオフィシャルサイトにいくつか歴史的建造物の写真が無許可でアップされていることを指摘し始めた。これは著作権の都合上、あまり望ましくないとのことであった。そして、今すぐにそれを削除しようと先輩は持ちかけてきたのである。私はそれをアップしたのは同じ学年のあるメンバーだと知って

いたが、彼の名前を出すことなく、その場で写真を削除することに同意した。写真を削除している間に、先輩に商社での仕事の様子について尋ねてみた。

するとそこで、一学年上のこれまた親しくさせてもらっていた2人の先輩(MN & TT)が体育館に笑顔浮かべながら入ってきた。そこから先もストーリーが展開されていったが、細かくは覚えていない。商社に勤めている先輩が一度どこかで朝食を取ってから、午前9時になったらまた体育館にやってきて練習をするというようなことを述べていたように思う。フローニンゲン:2019/12/7(土)
09:48

5309. 祈りと感謝の念が持つ力

時刻は午後1時半を迎えた。今朝の起床は自分でも笑ってしまうぐらいに早く、夜中の12時半だった。その出来事は今日なのだが、2時間半ほど寝ただけで十分な睡眠を取った感覚があったことを懐かしく思う。

先ほど嬉しい出来事があった。朝方に、太陽の姿を拝めることを祈るような気持ちで短い曲を作ったら、午後にわずかばかり太陽が顔を覗かせたのである。時間にして数分ほどの時間であったが、曲に込めた願いが届いたのかと思った。願うような、あるいは何か祈りを捧げるかのような気持ちで作った曲には何か力があつたのだろうか。

祈りについて思いを馳せていると、今から数年前に訪れたコペンハーゲンの美術館で見た、祈りを捧げる老女の彫像を思い出した。その彫像のモチーフは、祈りを捧げる年老いた修道女であった。その修道女は架空の人物なのだろうか、それとも実際の人物なのだろうか。それは当時の自分にはわからず、今の自分にもわからない。だが、おそらくその修道女が絶えず祈りを捧げるような日々を過ごしてきたのだということは、その彫像に刻印されていた。いや、それは刻印されていただけでなく、それが外側に放射していたのだ。

祈りの尊さとその力を感じる。昔ロサンゼルスに住んでいた頃にお世話になっていた合気道の師がかつて、「ヨウヘイさん、祈りには不思議な力があるんですよ」ということを述べていたことをふと思い出す。

午前中、感謝の気持ちを失ったら本当にダメなのだということを強く実感する出来事があった。それは太陽が顔を覗かせたのはまた違う出来事だった。この社会で生きていく上で、この世界で生きていく上で、様々な人や諸々の事柄に感謝の念を忘れてはならない。感謝の念には、きっと祈りに似た何か特別なエネルギーが内包されているのだろう。祈りを捧げることと感謝の念を持つこと。それらを絶えず行っていこう。そしてそれらの行為を通じて、自分の言葉と音を生み出していこう。

今、午後の楽しみの一つであるコーヒーが出来上がるのを待っている。挽き立ての豆が生み出す豊穡なアロマが部屋の中に広がっている。アロマが書斎の中に満たされていけば行くほどに、自分の心も満たされていく。

今日は昨日に比べると、風が穏やかである。今から1、2曲ほど曲を作ったら、軽くジョギングをしながら街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に行く。購入すべきものは、豆乳2本、椎茸、そしてバイオダイナミック農法で作られた4種類の麦のフレークである。冷たく寂しげな外の世界が、どこか穏やかな表情で微笑みかけてきているかのように感じる。そんな感覚をもたらしてくれる土曜日の午後だ。フローニンゲン:2019/12/7(土)13:48

5310. 「聴くこと」と「在ること」

今朝は午前3時過ぎに起床した。実際に目が覚めたのは午前2時だったが、昨日は午前12時半に起床していたこともあり、今朝はもう少しだけ睡眠を取っておこうと判断した。そして次に目が覚めたら3時過ぎだったというわけである。

在るといふことの奇跡。先ほど咄嗟に出てきた言葉はそれであった。

今日もまた新たな一日がやってきて、今このようにしてこの世界に再び自己が在るといふこと。一見シンプルに思われるそのようなことが、とんでもないほどに奇跡的なことなのだといふことを先ほど嘯み締めていた。

今日はどうやら風が強いらしい。家に通じている換気口が時折カタカタと音を立てている。天気予報を確認すると、今週1週間は雨マークしか付いていない。今日もまた一日を通じて雨が降る時間帯が多いようである。風が何かを訴えるかのようにして強く吹いている。

自らの眼を養い、世界を把握していくことは重要であるが、詩人の Rilke も述べているように、凝視の先にあるものを大切にしたい。自らの眼を養うことを超えて、感じることを養っていくこと。それはとても大切なことのように思う。

昨日読んでいた音楽と意識に関する書籍の中にも、眼だけではなく、耳を開発することの大切さが書かれていた。自分の内側の声を聴くこと。自他の魂の声を聴くこと。世界の声を聴くこと。そうしたことを可能にする耳を涵養していくことの必要性。そのようなことを考えていた。

風の声が聴こえてくる。それを聞いた時、そこに風がこの世界に生まれたことを知り、風の存在認識を通じて自己の存在認識が生まれたことを知る。

「聴く (to listen)」というのは「在る (to be)」ということだったのだ。この世界に存在する多様な存在者の声を聴き、彼らとの交流を通じて生まれる自分の内側の声に絶えず耳を傾けたい。そして聴こえてきた声の内容を曲の形にしていきたい。それを通じて、自他の耳の変容を促すことができないだろうか。そのような考えが浮かぶ。

昨日、上の階に住むピアニストの友人に一つお願いをした。昨年も同じお願いをしたのだが、彼女が日本に一時帰国する際に、3冊ほど和書を持って帰ってきてもらうことにした。昨年は随分と重たい本を持って帰ってきてもらって迷惑をかけたため、今年は文庫本を中心に持って帰ってきてもらうことにした。本当はその他にも入手したい和書がたくさんあるのだが、それは来年の秋に自分が日本に一時帰国した際に購入しようかと思う。その友人の実家宛に送らせてもらった3冊とは、『万葉集 全訳注原文付(一) (講談社文庫)』『リズムの哲学ノート (単行本)』『小泉文夫フィールドワーカー人はなぜ歌をうたうか』である。万葉集への関心の高まりは、先日の日記に書き留めた通りである。

昨日近所のスーパーから戻ってくる最中にある考えが芽生えていた。万葉集の一つ一つの歌を読み、それによって喚起されるものを応答の形として短い曲にしていきたいというものだった。遙か古の人たちが詠った歌を読んで、自分の歌を曲として詠っていくこと。それを行いたい。その他の2冊に関しては、前々から音楽の持つリズムの本質と歌の本質について関心があった。ここ最近イギリスやドイツの書店から書籍を随分と注文したばかりだが、それらは着々と読み進められている。上記

の3冊の書籍を読み進めていくことが今から楽しみだ。それは新年の素晴らしい贈り物になるだろう。フローニンゲン:2019/12/8(日)04:09

5311. 土作りと調和～地中の中で日々を生きて

今、大麦若葉を白湯に溶かし、そこにソイプロテインを溶かしたドリンクをゆっくり味わっている。大麦若葉にせよ、ソイプロテインにせよ、自分が他の生命に助けられながら日々を生きていることを実感する。昨晚の夕食の時にもそれを実感していた。

毎晩食べるオーガニックの野菜たちへの感謝の念。彼らを食べるということは、彼らの生命をいただくことなのだ。彼らにいただくことを通じて、彼らの歴史が自分の中に取り込まれていき、そしてまた自分の歴史がゆっくりと前に進んでいく。

この寒さの厳しい冬にあって、土をしっかりと耕していくこと。しかもそれはできる限りゆっくりと、自らの固有の生命のリズムに合わせて行っていく必要がある。土づくりが大切なことは、人間にも当てはまることなのである。子供たちの人間発達上の土を育てていく教育。成人たちの人間発達上の土を再度耕していくような教育。健全な土を育み続ける教育について思いを馳せる自分がいる。

時刻は午前4時半に近づこうとしている。相変わらず、換気口がカタコトと強風によって音を立てている。時折、激しい風が家の前を走り抜けているのを感じる。実際にそうした音が聞こえてくる。

昨夜、シュタイナーが提唱したバイオダイナミック農法に関して少しばかり調べ物をしていた。そこである動画を見て、この農業の根幹に横たわる思想とその実践方法に大変感銘を受けた。人に優しい食物を作ることだけが念頭に置かれているわけではなく、地球にも優しい形で進められている農法がそこにあった。

またそこには、人間が地球のみならず、宇宙とどのように調和をしていくのかを考え抜いた思想と実践がある。天体のリズムに合わせて地球が躍り、人間が踊る。私たちがこの世で調和的に生きるというのは、そうした躍りを踊ることなのかもしれない。生きることの本質には、そうした躍りがあるように思えてくる。

まだまだ果てしなく暗い闇の時間帯が続く。こうした闇の時間の中で、闇そのものと調和を図ること。闇を闇と認識せずに、つまり闇と自己とを切り離さず、闇と手を繋いで一つの踊りを踊ること。それができるようになってきたら、それはどれほど素晴らしいことだろうか。

闇の中を相変わらず駆け抜けていく剛風。その力強く進む姿には打たれるものがある。風はどこからかやって来て、どこかに向かって進んでいく。だが不思議と、風には出発地点も終着地点もないのではないかと思えてくる。風は人生であり、人生は風であったか。

冬の間、地表は閑散としているが、地中の中では生命たちが活発に生きている。彼らは生命力を蓄えながら呼吸をし続けており、霊的な活動を続けている。そうした彼らの姿と今の自分の姿を思わず重ねてしまう。そう重ねてしまうことは決して悪いことではなく、むしろ大切なことなのだと思う。

確かに北欧に近い北オランダの一つの街で生活を営んでいることと関係はしているだろうが、おそらく私は世界のどこにいても、今感じているようなことをこの人生のこの時期に感じていたことだろう。今はとにかく地中の中で呼吸をし続けていくこと。自己を育みながら、霊的活動を絶えず続けていくこと。それを大切にして毎日をこの地中の中で生きたいと思う。今私は新たな自己の誕生に向けて、地中の中にいる。フローニンゲン:2019/12/8(日)04:36

5312. 漆黒の闇に抱かれて:緩やかな揮発過程の終わりに

全き闇。漆黒の闇の世界に思わずうっとりとしてしまう。闇を愛せるようになった自分がここにいる。光を求めることに躍起になるのではなく、闇の存在に感謝の念を捧げ、闇の中でくつろぐこと。そうしたことが可能になり始めている。

アメリカでの4年間は光を求めていた時期だったか。いやあの頃は、闇の存在など目に入っていなかったかもしれない。仮にそれが目に入っていたとしても、光で闇をかき消そうとして生きていたように思える。欧州での生活を始めてから、闇との向き合い方は緩やかに変化していった。最初は、この深い闇の世界に押し潰されそうになっていたのを覚えている。ひるがえって今は、闇がまるで1人の親友になったかのようだ。

闇の持つ味わい。闇にくつろぎ、闇を味わえるようになり始めている自己が芽生えつつあるのは大きな進歩だろう。そうしたことは、私の色彩感覚の変容にも現れているように思う。

思わず息を飲んでしまうような色鮮やかな絵画作品はもちろん好きだが、それとは対照的に、白と黒の世界だけで表現された芸術作品にも魅力を感じ始めている自分がある。白の上には何でも描けてしまうという不思議さ。その無限の包容力。一方、黒の上に何かを描くと全てがかき消されてしまうかのような偉大な力がある。逆に言えば、黒もまた全てを受け入れる力を持っていると言えるかもしれない。なるほど、この瞬間の自分が深く落ち着いているのは、全てを抱擁してくれる闇が自分の周りを取り巻いているからなのだろう。漆黒の闇に抱かれているという絶対的な安心感。それは光に包まれているという安心感と同等か、あるいはそれ以上の安心感をもたらす。

私たちの魂を育ててくれるのは光だけでは決してない。光と闇の双方が私たちの魂を育ててくれるのだ。そして、光は闇であり、闇は光であることを忘れてはならない。光が闇であり、闇が光であるというのは自明過ぎるほどに自明なのだが、私たちはそれをなかなか理解しない。光がある時、そこには闇があり、闇がある時、そこには光がある。光と闇はそもそも区別されるようなものではなく、同一存在の表裏に過ぎないのだとわかる。光と闇がある時、そこには全てがあり、光と闇がなくなってしまった時、そこにもまた全てがある。

早いもので、気がつけば12月も来週から第2週目となる。欧米で過ごす8回目の冬が、ゆっくりと進行している。この8年間において、日本から背負ってきた古い思考と感覚が徐々に揮発していったのを実感する。それはとても緩やかな歩みであった。今、欧米での8度目の冬を体験している最中だが、どこか自分の思考と感覚が全く新しいものに生まれ変わっているを感じる。過去の自分が背負っていたものがようやく揮発され尽くしたのだろうか。

緩やかな揮発過程に準ずる形で、自分が徐々に解放に向かっているのを感じている。それは真の自由に向けた解放である。あるいは、真に自己を実現していくことに向けた解放と述べていいかもしれない。私たちは、自己を解放させようと意気込みがちだが、そもそもその自己を丸裸にし、完全に手放してみるといのはどうだろうか。ある対象を解放させようとしながら、それがなかなかうまくいかないのは、そもそも対象を掴んでいるから、あるいは対象に固執しているからなのではないだろうか。小さな自我を丸裸にし、そして手放すこと。それができれば、小さな自我は自然死を遂げ、真の

自己実現なるものが成就され、真の自由を享受できるような気がしている。フローニンゲン:2019/
12/8(日)05:03

5313. 今朝方の夢と願い

今朝方の夢についてまだ振り返りをしていなかったなので、夢を振り返ったのちに早朝の作曲実践を始めたい。とは言え、今朝方の夢はそれほど記憶に残るものではなかった。

小中学校時代の友人2人(YU & NK)と一緒に楽しげに話をしている場面があったのを覚えている。話の内容は定かではないが、私たちを包む場所は優しい太陽光に照らされていて、太陽の光に似た色の喜びを感じていたのを覚えている。

その他の夢の場面として、ある知人(TG)が寝ている私を起こしに来るというものがあった。私は座敷のような部屋で布団を敷かず横になっており、そこに知人がやって来て、私を起こそうとしたのである。私は寝たふりをしており、彼が諦めてどこかに去っていくのを待っていた。しかし、彼は一向にその場を去ろうとせず、執拗に私を起こそうとする。彼がなぜ私を起こそうとしていたのかというと、教育関係の問題解決に向けて私の協力が必要だったからである。実際に彼は寝たふりをして私に向かって、そのようなことをしきりと述べていた。人間の発達と社会の発達を実現させていくために、私の知見が必要であると彼は訴えていた。それでもまだ私は寝たふりを続けていた。

すると、彼は私の足を触り、初めて聞くような日本語を述べた。意味としては「肥満」を指しているのだが、その言葉を私は初めて耳にした。そもそも私は肥満などでは決してないと思われ、なぜ彼が私の足を触りながら肥満を意味する言葉を述べたのかはわからない。彼は私を起こすことを止め、座敷部屋から出ていこうとした。そこで私は、突如何かに打たれたかのような感覚になり、ハッと目を覚まして、彼の後を追おうと思った。そこで夢から覚めた。

昨夜もまた、この世界に対して自分にできることは何かあるのかと考えていた。この世界に関与し、貢献できることが、自分の中に何か一つでもあるのだろうか。そのようなことを考え続けていた。結局それは具体的な形を持つには至らなかった。そうした取り組みが何なのかははっきりしないが、何かがありそうだという感覚、そして一つでもそうしたものがあってほしいという願いのようなものが芽生えた。

自己を生きることと、世界に関与し、貢献することが完全に一致する活動。それは自分にとって一体どのようなものなのか。それを探している自分の姿を見ていると、やはり私はまだ探求人なのだと思う。あるいは、旅人と呼べるかもしれない。仮に永遠の探求人・旅人であり続けたとしても、日々生きる中での一挙手一投足が、世界と深く繋がったものであり、世界に何かしらの貢献を果たすものであってほしいと願う。フローニンゲン:2019/12/8(日)05:28

5314. 内なる芸術家の緩やかな目覚め: 芭蕉に関する旅

—音の神秘を知る者は、宇宙の神秘を知る者だ—ハズラット・イナヤット・カーン

つい今し方、本日7曲目の曲を作り、その曲を聴きながら喚起される感覚を水彩色鉛筆で絵の形にした。曲を作ること、そして絵を描くことは、自分の意識を内側に向けさせてくれる。それは瞑想とほぼ同じものか、瞑想以上に深いインナーワークであるように思えてくる。

雑念の波が穏やかになり、波そのもの、いや雑念を生み出す海が消失する。そんな状態の中で音を生み出したり、絵を描いている自分がいた。こうしたことを日々続けていると、シュタイナー教育が大切にしている「内なる芸術家」が目覚めてくる。それは幼少期から損なうことなく育めれば最善であるが、大人になってからでもそれを目覚めさせ、育むことが可能なのだと実感する。ゆっくりとでいい。ゆっくりと着実に、自分の内なる芸術家を目覚めさせ、それを育みながら共に生きていこうと思う。

音の神秘を探究するプロセスが進む。それもまた、内なる芸術家を見出し、それを育むプロセスと同じぐらいに緩やかであるが、毎日緩やかにそのプロセスも進んでいる。今日から、アーノルド・ショーンバーグが執筆した“Style and Idea: Selected Writings of Arnold Schoenberg (2010)”を読み始めた。早朝に少しばかり本書を読み、600ページ中70ページほどを読み進めた。午後からもゆっくりと本書に向き合っていく。ショーンバーグの指摘の中で、一つ大きく共感するものがあった。作曲において重要なのは、他者を喜ばせようなどという邪念を持って曲を作るのではなく、兎にも角にも自らを喜ばせる曲を書くべきだということだ。他者に媚びるような曲を作ることに喜びを一切見出すことができない。仮に他者に向けて曲を書くことがあるとすれば、それは本当に愛している人に対してだけなのではないだろうか。

そうなってくると、上述のショーンバーグの考え方、及びそれに共感した自分の考えに矛盾するが、隣人愛の輪を広げていくことができれば、他者に向けても曲を書くことができるのだろうか。そのあたりはまだよくわからない。いずれにせよ、現段階では、自分の魂を喜ばさずして、一体誰の魂を喜ばすことができるだろうか、という精神で曲を作っていく。時に魂は喜びのみならず、慰めや励ましも必要であろう。喜び、慰め、励ましを自分の魂にもたらしような曲を作っていきたい。

午前中、来年の秋の日本への一時帰国に際して、松尾芭蕉が旅をした場所に足を運んでみたいと思った。芭蕉の旅の跡を巡るような旅を行いたいという気持ちが芽生えた。しかもその時には、芭蕉の句集を持参し、句が読まれた場所でその句を読みたいと思う。そんな贅沢な旅を実現したい。少しばかり調べてみると、三重県に芭蕉翁記念館というものがあり、そこから歩いて15分ほどの距離に芭蕉が弟子と過ごした蓑虫庵がある。来年もまた大阪に滞在する予定であるため、それらの芭蕉ゆかりの地に足を運んでみよう。フローニンゲン:2019/12/8(日)11:19

5315. 「エポックノート」としての日記と作曲～自分なりの教科書を作成すること

時刻は午後3時を迎えようとしている。今、至福の時間を過ごしている。それはなぜかと言うと、挽き立てのコーヒーの完成を待っているからである。挽いた豆をドリップして待つこの間のなんとも言えない幸福感。なんとも香ばしいアロマが書斎に広がっている。

幸いにも、午後から天気が回復し、太陽の姿を拝むことができた。今も優しい太陽の光が地上に降り注いでいる。この時期に太陽が姿を現す時には、それが午前中であっても正午であっても関係なく夕方の太陽の光に似ている。光の持つ優しさと印象が、夕日のそれに近いのだ。もちろん、時間帯によって多少の差はあるのだが、この時期の太陽の光は絶えず優しげだ。

このところ、またしてもシュタイナー教育やシュタイナーの思想に対する関心が高まっている。一昨日に偶然ながら、シュタイナー教育に関する日本語の素晴らしいドキュメンタリー番組を見つけた。それについて後日また改めて書き留めておきたいが、その番組の中で、「エポックノート」と呼ばれる存在について知った。これは以前にもどこかで見聞きした覚えがあったのだが、すっかりその存在を忘れてしまっていた。エポックノートとは端的には、自分だけの教科書のことを指す。シュタイナー教育では教科書を用いないことは有名である。教科書を用いない代わりに、教室で学習したこ

とをもとにして自分自身の教科書を作っていくのである。それはどこか、各人の関心や発達段階、そして個性に応じた学びの理想的なあり方のように思えてくる。

先ほど近所のスーパーからの帰り道にふと、毎日このようにして綴っている日記や、日々の作曲実践で曲という形を残していくというのは、自分にとってのエポックノートの作成に他ならないということに気づいたのである。それは自分にとっての学びの最良の教科書であり、人生の最良の教科書である。書かれた日記や曲を再度眺めてみたときに、それらがどれだけ自分に学びをもたらしてくれることか。

単純に知的なものだけではなく、身体的・霊的なものも含め、日々学んだことや感じたことを、まるでエポックノートを作成するかのように日記として執筆したり、曲として形に残すということを行っている自分がある。それがどれだけ自分の学びを深め、自己を深めてくれるのかを改めて知る。こうした体験を通じて、自分なりのエポックノートを作るというのは、何も子供たちの学習にとって有益なだけではなく、成人の学びにとっても有益なのだわかる。果たしてどれほどの大人たちが、自分なりのエポックノートを作成しているだろうか。他者が執筆した教科書的な書籍を熱心に読む大人は多くても、自分自らの教科書を作成するという姿勢で日々学習をしている大人がどれほどいるだろうか。自己に根差した学習を行うことが、自らの学習や自分自身を真に深めるということを思い出したい。おそらくそうした学習こそが、発達を促す自己教育なのだろう。

今後は、シュタイナー教育でユニークなオイリュトミ的な身体表現や、絵画表現、音楽表現、そして言語表現などを通じて、多角的な観点で自己教育を継続させていきたいと思う。フローニンゲン：
2019/12/8(日)15:11

5316. 今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えた。今朝の起床は午前3時半であり、それぐらいの時間に起床することは特に早いものではないと感じられるようになった。感覚として、午前2時あたりに起床するのが少し早いと感じるぐらいだろうか。午前3時や3時半あたりに目覚めることは、今の自分にとって最適のように思われる。心身の状態を見ればそれが一目瞭然だ。

早速ではあるが、書斎の窓の向こうに広がる闇の世界を眺めながら、今朝方の夢について振り返りたい。夢の中で私は、小中学校時代の親友4人と一緒に会話を楽しんでいた。会話をしていた場所は地元のある旅館の中だった。親友の1人が、これからみんなでご飯でも食べにいこうと話をもちかけた。しかし、その旅館には食事がついていたため、別の親友がそれについて指摘し、結局外に食べに行くのではなく、旅館の中で食事を摂ることになった。その食事は、日本食が美味しいことで有名であり、ビュッフェ形式でそれを楽しめるようになっていた。

私たちは早速食事会場に足を運び、席を確保してから、各々好きなものを取りに行くことにした。そこに置かれている食事を見ると、確かに美味しそうであり、質も高そうなのだが、私が食べれそうなものがあまりなかった。肉類を取ることを避け、良さそうなものを取ってみたところ、それは魚であることに気づき、魚すらもなるべく食べないようにしている私は、それをまた元の場所に戻した。すると、そこからしばらく魚料理が立て続けに並べられており、よく焼けたサバなどは美味しそうに見えたが、それを取ることを避けた。何か食べられるものはないかと探していたところ、親友の1人が何か神妙な顔をして立っている姿が見えた。彼に近づいていくと、彼の母親がそばにいて、何か2人で話し込んでいた。

親友の母親は、最近結婚したばかりの親友の結婚生活がとても順調だと思っているようであり、それを喜んでいる様子だった。しかし、親友は顔を曇らせており、おもむろに口を開き始めた。実は親友の奥さんはかなり気が強く、家庭内で親友は恐妻家になってしまっているとのことだった。そして、実はもうすでに離婚していると述べたのである。奥さんが気の強いことは知っていたが、すでに離婚していたとは知らなかったもので、少々驚いた。親友の母親もそれを知って少しショックを受けているようであり、しばらく茫然とそこに立ちすくんでいた。私は親友を励ますために、食事を摂ることは後回しにして、ちょっと外の空気にも当たりながら話をしようと思いをもちかけた。親友はコクリとうなづき、2人で外に出て話を始めたところで夢の場面が変わった。

次の夢の舞台はサッカーグラウンドだった。そこはイタリアの田舎町のグラウンドであり、イタリアのサッカープロリーグの2部に所属するチームのグラウンドだった。そこに元日本代表の選手(MM)が移籍してきて、今から彼のデビュー戦が行われることになっていた。確かにそれはデビュー戦だが、公式戦ではなく、同じく2部に所属する他のチームとの練習試合だった。練習試合とは言え、移籍したばかりのその選手にとっては、仲間から信頼を勝ち取り、ポジションを獲得するための大事な

試合だった。そもそもその選手をこのチームに呼んだのは、元サッカー日本代表のブラジル人監督だった。その監督も昔イタリアの1部リーグに所属しており、そこで素晴らしい活躍を見せていた。その時の縁があって、その監督はその選手をこのチームに推薦したのであった。私はその選手の切れ味鋭いドリブルが好きであり、今日はその選手を応援するためにグラウンドに来ていた。早速練習試合が始まると、練習試合とは言え、公式戦さながらの激しさがあった。

双方のチームの選手たちは、まさに生き残りを賭けたような真剣な表情でプレーしており、激しいプレーが続いていた。緊迫した雰囲気の中で試合が進んでいき、ある時、相手の選手がその日本人選手に激しいスライディングタックルを仕掛けた。それはかなりのラフプレーであり、完全にファウルなのだが、審判はそれを流していた。その選手は相手のタックルによって倒れてしまい、起き上がったところに相手チームのマスコットキャラクターがいた。クマの着ぐるみをきたマスコットキャラクターは、起き上がったその選手に何か挑発的な言葉を投げかけていたようであり、その選手はマスコットキャラクターを軽く突き飛ばした。すると、マスコットキャラクターはその可愛らしい顔には似つかず、挑発的なジェスチャーを投げかけていた。

結局、その日本人選手は本来持っている力を発揮できないまま前半終了を迎えることになった。前半が終了し、選手はロッカールームに引き上げていった。なぜか私もロッカールームの方に向かって行った。すると、ロッカールームは地下道にあって、その地下道は、その街の商店街や病院などとつながっているようだった。ロッカールームに行く前にトイレに立ち寄ろうとすると、ファン同士がいざこざを起こしており、私とその現場に近づいて行った時に、1人のイタリア人男性が地面に倒れ込んだ。見ると、その男性の脳天にアイスピックが突き刺されており、殺されているようだった。私はそれを見て一瞬驚いたものの、冷静に対処する必要があると思った。すると、私の意識は地下道に直結している病院にあり、そこで2人の外国人ドクターが話をしているところに立ち会った。2人はどうやらカップルのようであり、良き同僚でもあるようだった。

2人は手術などを施すドクターというよりも、薬の研究を行っているドクターのようだった。何やら、新薬の発明にあと一步のところまで迫っているらしかった。2人は笑顔を交えながら会話をしており、新薬を発見した方が、今度の論文で最初に名前を載せることにしようという取り決めをしていた。2人はどうやら同じ名前のようにあり、そのようにお互いが競い合うことによって、研究の最後の詰めを行おうとしているらしかった。フローニンゲン:2019/12/9(月)04:39

5317. 芭蕉の感性:日々の小さな積み重ね

時刻は午前5時に近づいている。昨日は断続的に雨が降っていながらも、太陽の姿を拝むことができてほっと一息ついていたのを思い出す。

今この時間帯には雨は降っていないが、正午を挟んでその前後に雨が少し降るようだ。静けさの中に溶け込んでいってしまいそうな自分がいる。

昨日は、再び芭蕉について思いを馳せ、来年の秋に一時帰国した際には、芭蕉の句集を購入し、芭蕉に縁のある土地を訪れようと思った。芭蕉の感性には学ばされることが多く、詩人としての眼は特に注目に値する。対象を説明するのではなく、感動を呼んだ対象の内側に入り、その対象の固有の性質を掴んでいくこと。芭蕉にはそれができた。芭蕉の言葉で言えば、「松のことは松に習へ」という精神で、対象の中に深く入りこみ、対象の本質に至る術を芭蕉は心得ていた。芭蕉が俳句を詠む時、そこでは対象との主客合一が起こっていたのではないかと思う。

小さな自我が溶解し、対象と一体となることによって生み出された俳句の数々には打たれるものがある。とても気が早いのが、来年の日本旅行に期待が膨らみ、胸が高鳴る。

日々日記を執筆することと、毎日内的感覚を音の形にするという作曲実践は、絶えず小さな変化を自分の内側にもたらしめている。そうした変化は、バタフライ効果を引き起こし、いつか巨大な変容を突如生み出す。そのようなことを昨晚考えていた。それは考えていたというよりも、実際に日々刻々と自分に起こっている直接体験の確認であったと言った方がいいだろうか。日々の小さな積み重ねは、本当に驚くべき力を持っている。進んでいないようでも小さく進んでいくことが、どれだけ私たちが遠くに運んでくれるだろうか。

一気に遠くへ行こうとしてはならない。それは発達の手である。いや、多くの物事の核にそれがあるように思える。例えば旅において、飛行機である地点まで一気に飛んでいってしまうことは、本来地上を移動することによって得られる旅の情緒や風雅を奪い去ってしまう。地上を緩やかに移動し、その変化を楽しむことが、どれだけ私たちに感動をもたらすことか。そして、感動によって心が揺動かされたということが、どれだけ私たち自身、そして私たちの人生を深めてくれるだろうか。

今日もゆっくりと歩みを進めていこうと思う。それは本当にゆっくりとしたものであっていい。むしろそれが早いと感じたら、あえて立ち止まろう。そして後ろを振り返り、後ろの景色を味わおう。そして、その景色を味わうその時間そのものも味わおう。こうしたプロセスを経ずして、自己と人生が涵養されることはない。

昨日その他に考えていたこととしては、能力や知性の複雑化のプロセスと同様に、自分の曲も徐々に複雑化の道を進んでいくだろうということだ。それはもちろん、外見上の複雑さを単純に意味しない。形になることを望む内側の何かを外に出てくる際に、それを十全に表現するに足る複雑さを持つということである。形になろうとするものを、彼らが望むような形で曲にすることは極めて難しく、それを行うためには鍛錬された技術が要求される。そうした技術を少しずつ獲得する中で、複雑さの中にある単純さや、単純さの中にある複雑さがより色濃く曲の中に形として現れ始めるだろう。フ
ローニンゲン:2019/12/9(月)05:14

5318. オランダの健康保険に加入して～社会貢献としての保険料の支払い

一昨日にオランダの健康保険に加入をした。そのことについてまだ何も書き留めていなかったように思う。これまでの3年間は、ビザの関係上、オランダの保険に加入する必要はなく、留学生や海外生活者向けの、世界のどこの国でもある程度の事柄をカバーしてくれる保険に加入していた。

先日正式に起業家ビザを取得したため、今年からオランダの保険に加入することにした。「加入することにした」と言うと、何か自分の意思で加入するのかもしれないかを選べるように思えるかもしれないが、実際のところは強制である。オランダでは、日本とは異なり、国民健康保険のようなものがなく、個人が民間の保険会社を選び、そこで保険をかけることが義務付けられている。これはオランダ人だけに当てはまることではなく、オランダで生活をする全ての人があるような形で医療保険に加入する必要があり、それは義務付けられている。滞在許可が得られてから一定期間以内に保険に加入しないと、オランダ政府から罰金が課せられる(350ユーロほどらしい)。正直なところ、日々健康に気をつけているため、保険にお世話になることは全くと言っていいほどなく、もし万が一の時があったらもうそれは万が一なのだから諦めてあの世に行こうと考えている自分がいるが、保険に加入することが義務付けられているのだからしょうがない。

罰金で課せられる350ユーロと、年間の最低保険料の合計を比較してみると、罰金の方が遥かに金額が低く、年間の最低保険料の合計の1/4なのだから、いっそのこと罰金を払った方がいいと考えることもできなくもない。もしオランダに1、2年だけ住むことを考えるのであれば、それは社会の裏道を通るようなやり方としては賢明なのかもしれない。だが、私のように、これからも長くオランダで生活をしていきたいと考えている者にとっては、やはりそれは賢明な選択ではないだろう。おそらく保険料の支払い拒否は、法律違反とみなされるだろうから、そうしたことをしていると、ビザの延長やオランダでの永住権取得に影響を与えるであろうことが予想される。

オランダ永住権と欧州永住権の取得に向けて、そのようなことを考えながら、渋々保険に加入したのだが、加入の手続きを終えてみて、あることに気づいた。自分が健康保険に加入して、毎月保険料を支払うことは、一種の社会貢献であることに気づいたのである。

もう加入する前からわかっていたが、毎月支払う保険料は私個人にとっては全く無駄である。保険にお世話になるようなことは今後何年もないであろうし、保険にお世話になるような瞬間がやってきたら、それはもう人生の最後の瞬間なのだと思っているため、月々の保険料の支払いは固定費の増加でしかなく、個人のファイナンスの観点からしたら、これほど馬鹿らしいカネの使い方はない。しかし私はふと、自分が毎月保険料を支払うことによって救われる人がいることに気づいたのである。突如、先月にバスに轢かれた女性を目撃した光景が脳裏に浮かび、そうした不慮の事故に遭遇してしまった人たちを救うのが保険であり、そうした保険に自分が加入して、自分の資金を提供することは一種の社会貢献に思えたのである。そうした発想の転換が起こると、保険料の支払いという一見すると馬鹿げたカネの使い方にも社会的な意義があると感じ、肯定的な感情で支払いをすることができる。

さて、上述の通り、オランダでは、自分のニーズに合わせて各人が民間の保険会社を通じて保険に加入する必要がある。様々な保険会社がある中で、どこにしようかと考える際に、デン・ハーグに住む友人から教えてもらった比較サイトが非常に役に立った。それは、こちら「<https://www.independer.nl/>」のものである。オランダの保険の加入に際して必要なのは、BSN(ソーシャルセキュリティーナンバー)と銀行口座番号だけであり、それ以外には特に必要ない。その他に必要なことを挙げるとすれば、自分のニーズを考えることだろうか。保険会社を選ぶ際には、ニーズを考えて、自己負担金額をどの程度にするのかを自分で決めていく必要がある。自己負担金額の最低

金額は385ユーロであり、そこから100ユーロ刻みで885ユーロが最大だ。自己負担学を上げれば上げるほど、月々の保険料の支払いは安くなる。

現在の自分の健康状態を考慮した上で、私は自己負担額を最大のものにした。基本的な事柄をカバーしている保険を選び、半年に一度は歯科医に入って歯の検査とクリーニングをしてもらっているので、基本プランに歯科医の保険を追加した。上記のウェブサイトを通じて保険を選ぶのにそれほど時間が掛からず、無事に保険に加入することができた。保険は毎年見直すことができるため、今年1年間現在の保険に加入してみて、プラン変更が必要であれば来年それを行おうと思う。フ
ローニンゲン:2019/12/9(月)05:52

5319. 檻に閉じ込められた鳥たち

世界が動き出すこの感じ。私はこの時間帯が好きだ。時刻は午前9時半を迎え、今日は月曜日という日もあってか、世界が躍動している感覚を受ける。雨はまだ降っておらず、遠くの空に朝日が輝いているのがかすかに見える。

挽き立てのコーヒーを飲みながら、至福感に包まれてこの世界にあるということそのものが幸せな感情を生み出す。そこには二重の幸福感があるということになるだろうか。カカオには幸福感を引き起こす物質が含まれており、それはコーヒー以上の含有量なのだが、私はどうもコーヒーを飲んでいる時の方が至福さを感じるようだ。それはアロマと関係しているのかもしれない。また、そもそも私は嗅覚を通じてより幸福感を覚えるタイプなのかもしれない。

檻に閉じ込められた鳥たち。檻が開けられたのに外に飛び出していない鳥たち。そんな鳥たちの姿が脳裏に浮かんだ。鳥が何を象徴しており、檻が何を象徴しているかは自分にとって明白だった。人々は結局のところ、組織や社会の檻にひとたび入れられてしまうと、仮に檻が開けられても外に出ることができないのだと思う。

ひとたび檻の中で飼い慣らされた鳥は、檻の扉が開けられても外に出るのを嫌がるそうだ。せっかく檻が開き、自由の身となったのに。仮に檻の外に飛び出していき、自由を享受したと思っても、餌の取り方を忘れてしまった鳥は、長く生きていけないそうだ。そんなエピソードを見聞きしたことがある。

檻の世界の中の快適さと檻の外で生きていくことへの恐怖。人間に飼い慣らされた鳥も、組織や社会で飼い慣らされた人間も、その辺りは共通のようだ。そのようなことを考えていると、近年注目を集めている成人発達理論やインテグラル理論の枠組みを活用した人材育成方法に疑問を感じる自分が姿を現した。結局そこでは、いかに既存の檻の中で生きていくのかという発想の枠組みの中で人材育成が行われており、檻の外に出て、自己を解放して自由に生きることを促そうとする発想はほぼ皆無である。

これまでいろいろな協働プロジェクトに携わってきて、様々なプログラムを見てきたが、そのプログラムを受講したことによって、受講者が檻から脱出することができなければ、そのプログラムの質は低いものだと言えるのではないかと思う。あえて極端なことを言えば、そして本質的なことを言えば、真にその人を成長させてくれるプログラムを受講したのであれば、必然的に既存の檻から出ていく選択肢を当人には取るであろうから、会社を辞めるという選択肢が最上位に来ることは何らおかしいことではなく、逆にそうした選択肢が生まれてこないのであれば、そのプログラムは欺瞞の塊である。

この点について、人の成長を促すプログラムの作り手、及びそれを活用する企業の双方は、ほとんどが善意なる詐欺師であり、両者は結託している点が問題のように映る。彼らは、真の発達というものが囚われからの解放であることの真意をほとんど理解しておらず、プログラムの受講者がプログラムの終了後に組織から離れる決断をすることをひどく恐れている。そうした恐れを抱くケースを数多く見てきた。むしろそうしたケースしかないのではないかと言えるぐらいだ。

無知で善意な詐欺師が結託共謀する組織や社会の中で生きることの過酷さ。檻の中で与えられる餌は、檻の中にいることの心地良さを与えるが、自らの心身及び存在そのものが蝕まれていることに麻痺させる。人々が既存の檻から出ていき、自由を獲得していくことを喜べるのかどうか、今後協働プロジェクトに関わる際の基準となるだろう。

幾分自覚的ではあったが、過去の自分もまた詐欺師だったのだと思う。だがもはや、多くの人たちが檻の中で苦しみ、もがき、そして騙され続けている状態を見過ごすことはできない。善意の詐欺師はもはや私に何も話を持ちかけてこないだろう。彼らの行動が善意な詐欺行為であることを指摘すれば、私は恨まれるだろう。それでも、檻に入った鳥たちを自由な外の世界に解放し、再度餌の取り方を一緒に学び、一緒に外の世界の自由さと素晴らしさを味わいたい。

私もまた一羽の鳥であり、鳥が檻に入った鳥を見過ごすことができないのは当たり前なのではないだろうか。鳥たちは仲間なのだ。一方、檻の外にいる善意の詐欺師たちは、人間の顔をした悪魔なのかもしれない。

家の外で小鳥たちが嬉々とした鳴き声を上げている。この声が聞こえるだろうか。また、自分はそうした喜びに満ち溢れた声を日々上げているだろうか。自分はもう、あの鳥たちのように解放された鳥として生きていく。そして、解放を望む鳥たちに手を差し伸べる。「約束だよ」そんな意味が込められた鳴き声を、小鳥たちが高らかに外の自由な世界に響かせている。フローニンゲン:2019/12/9
(月)10:07

5320. 天体と自己との調和が奏でる歌の創造に向けて

時刻は昼の12時半を迎えた。つい今し方、バイオダイナミック農法で作られた4種類の麦のフレークに豆乳をかけたものをレンジで温め、それを食べた。そこにこの間購入した、これまたバイオダイナミック農法で作られたゴマペーストと蜂蜜を加えると美味である。

ここから午後の取り組みに取り掛かり、途中で一度仮眠を取りたいと思う。日々の作曲実践が、日記の執筆と同様に、自由連想的なフリーライティングの様相を呈し始めている。そのようなことに朝氣づいた。その日のある瞬間に感じられた内的感覚を、それが望んでいる形のままに作曲をしていくこと。ある音が次の音へと自由連想的に繋がっていき、曲を作る主体としての自己が作曲行為の中に溶け出していること。それら二つは重要なことであり、それらが実現されつつあることを嬉しく思う。作曲は自分の命の固有な運動に寄り添うことであり、寄り添って生まれた音を形にしていく行為に他ならない。存在で曲を書くというのはそういうことを意味するのだと自分なりに定義づけている。

今、アントン・ウェバーン (Anton Webern) の歌曲を聴いている。それはとても美しく、先日イギリスの書店に注文したウェバーンの歌曲集の楽譜が早く届いて欲しいと願う。それにしても、こうした歌曲を12音技法で書いたウェバーンの功績には改めて敬意を表す。12音技法で作る曲は歌にくさが難点だと思っていた自分の既存の考え方を打ち壊してくれたのがウェバーンの音楽である。私は、とにかく歌を大切にしたい。歌うことは祈りにも似た、いや祈り以上に何か尊いものがあり、偉大な力

があるように思っている。今朝方考えていた理想で言えば、天体と自己との調和が奏でる歌を作っていきたい。しかもそれを12音技法で作ってみたいという思いがある。

昨日から、アーノルド・ショーンバーグが執筆した“Style and Idea: Selected Writings of Arnold Schoenberg (2010)”を読み進めており、12音技法の活用に対して意義を見出し始めた自分がある。この技法は現代音楽においては古臭いものと見られがちのようであり、その扱いくさのために私はこの技法を敬遠していたが、ショーンバーグの考え方に触れてみると、この技法にしか表現できない世界があることに気づく。

ウェバーンの楽譜が届いたら、まずはこの技法を用いて歌曲をどのように作っていくのかを研究していきたい。そして、自分が実際に曲を作る際には、12個の音をどのように選び出すかの工夫をしたい。月の満ち欠けや天体の運行にしたがって音を選び出す工夫をしてみようか。プラトンが述べた天体の音楽のようなものを作ることができたらどれだけ素晴らしいだろう。この点に関しては、シュタイナーが提唱したバイオダイナミック農法における発想が何かヒントになるかもしれない。この農法においては、月の満ち欠けや天体の動きを参考にしている。そのあたりに数列作成のヒントを得てみよう。

12音からなる数列を1つ作ることができたら、その日1日は同じ数列を用いて、次の日にまた新しい数列を作り直す。天体と自分との関係性によって運命的に生まれた1つの数列とその日1日を共に過ごし、また次の日は新たな数列を通じて天体と共に生きていく生活。そうした生活を送りたい。こうして生み出された曲が、人間の聴覚範囲を拡張させるようなことにつながれば面白い。これまで聴けなかったものが聴こえるようになる音楽。それは物理的な次元での音だけではなく、心的、魂的、精神的、天体的な次元での音である。

日々私たちが生きている世界の中に充滿している豊穡な音に気づき、それらの音もたらす恩恵を享受しながら生きる日々を送りたいと思うし、多くの人がそのような日々を送って欲しいという願いがある。フローニンゲン:2019/12/9(月)12:59